

留学生の異文化適応に関する研究

— 来日目的、対日イメージと適応度との関連を中心に —

葛 文 綺¹⁾

問題と目的

中曽根政権が1983年に「留学生十万人計画」打ち出し
てから、在日留学生数は急速に増加した。現在、日本の
各大学に在籍している留学生の数は4万人に上るが、国
別で見ると、中国と韓国の学生が全体の約8割を占
めている(文部省, 1997)。その中でも、大学院におけ
る中国の学生数は韓国の学生数の約2倍となっており、
その数は突出している。

留学生の適応問題に関する研究は、様々な側面よりア
プローチされているが、留学動機に関しては、田畑と田
中(1991)は日本そのものへの関心の高い者の方が、留
学への満足度も高いという結果を示している。また、対
ホスト国イメージに関しては、アメリカで第二次世界大
戦以降盛んに行われてきた(Morris, 1956; Schild,
1962; Seltiz & Cook, 1962; Veroff, 1963)。日本で
は、岩男と萩原(1977a, 1977b, 1978a, 1978b, 1979,
1987, 1988)が、留学生の日本に対するイメージに関し
て、一連の研究を行っている。

一方、出身地域の違いが適応度に与える影響について
の研究も、アメリカを中心に行われてきた。Dadfar &
Friedlander(1982)は、文化背景が留学生の行動に大
きな影響を与えることを示した。Dadfar &
Friedlanderによると、困難に出会った時に、アジア
やアフリカ出身の学生と比較して、欧米の留学生の方が
より積極的にカウンセラーなどの専門家に援助を求める
傾向にある。Perkins, Perkins, Guglielmino &
Reiff(1977)の、中国・インドおよび他国出身の留学生
を対象とした研究では、中国の学生が他国の学生と比
べて、自国での学歴が高いが、英語力や友人関係、文化
情緒などの適応に多くの問題を抱えている。また、中国
とインドの学生は、同じ出身の人とだけ付き合いをもつ
ことをあまり問題と考えていない。

アメリカと比べて、日本では出身地域による適応度の

違いに関する研究は多くない。その中でも特に在日留
学生の半数以上を占めている中国の留学生に関する研究は、
きわめて少ない。その中で周(1993a, 1993b, 1995)は、
中国系の留学生を対象とした、ソーシャル・サポートに
関するいくつかの研究を行なっている。

このほか早矢仕(1997)は、自己認知と、自・他文化
への態度が適応に及ぼす影響を検討したが、中国と韓国
と台湾の留学生の間に、適応感に影響を与える要因が異
なることを明らかにしている。

葛(1999)は、中国の留学生が他国の留学生と比べ
て、精神的健康面を除いて、日本の文化や習慣への受け
入れ、対人関係、言語面などにおいてはよりカルチャー・
ショックを受けていることを見出している。まず、対日
感情について、中国の留学生の日本人に対するイメージ
は他国の留学生と変わらないが、日本という国にネガ
ティブなイメージを抱いている。また対人関係について
も、中国の留学生は、他国の留学生よりも対人関係が
うまく行っていないと感じている。その中でも特に、社
交的な場で他人と関わることが少なくなっていると感じ
ている。中国の留学生は経済的な問題を抱えている学生
が多いため、アルバイトに費やしている時間が他国の留
学生よりもかなり多いと推測される。このため、社会的
な場に出て、他人と付き合うことが少なくなっているこ
とが推測される。言語的コミュニケーションについて
も、中国の留学生に日本語能力が低い傾向が見られたの
は、そのほとんどが来日以前に日本語を習っていなかつ
たことによる。台湾の留学生は、日本語をある程度学習
してから来日するのが一般的である。また欧米の留学生
も、日本文化や日本語専攻の学生が多く、来日した時点
で日本語の理解が可能である学生が多い。また、日本語
が理解できなくても、母国語の英語を使用することで周
囲とのコミュニケーションが可能である。しかし、中国
の学生の場合、日本語も英語も外国語であり、どちらも
使いこなすことに、かなりの困難を感じるのではないだ
ろうか。

そこで、中国の留学生が他国の留学生よりも適応度が

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(後期課程)

低いことの背後に、どのような原因があるのかを特定し、中国留学生が抱えている問題、および中国の留学生の特徴を見出すことを本研究の目的とする。

予備調査

アメリカに現在留学している、あるいは留学経験のある中国人5名、日本に現在留学している、あるいは留学の経験のある中国人7名、および長期にわたって留学生指導を行っている日本人教師5名、さらに中国で外資系の会社に勤めている中国人3名、合計20人に「中国人留学生の適応度が、他国の留学生よりも低いのはどういった理由が考えられるか」という質問をE-mailで送り、自らの経験に基づいた、考えられる理由を返信してもらった。

以上の20人から得た回答を以下の4つの側面でまとめることができた。

- 1) 来日目的およびその達成度
- 2) 来日前後の日本に対するイメージの変化

3) 日本で遭った差別経験、それによってプライドが傷ついたこと

4) 様々な困難にぶつかり、あまり援助を受けていない
本研究ではこの4つの質問を用いて、半構造化面接を行うことにした。

方法

面接対象者 (Table 1, 2 参照)

面接対象者は日本の大学に在籍している中国人留学生。地理的に面接が困難と判断された中国の学生には、上記の4つの質問が印刷されたはがきを郵送した。はがきには筆者のE-mailのアドレスが記入されており、E-mailで返信をするように依頼した。結果、面接で8名、電話によるインタビューで3名、E-mailで2名の、合計13名の回答が得られた。

実施期間

1998年9月中旬から11月の中旬にかけて行われた。

Table 1 面接対象者の属性

名前 (イニシャル)	性別	年齢	身分	専攻	滞日期間 (ヶ月)	日本語能力	奨学金	面接方法
F.M.	男	43	研究生	文系	12	上	財団	面接
S.Q.	男	35	院 生	文系	26	中	財団	面接
Z.X.	男	31	院 生	理系	18	中	無	面接
C.J.	男	32	院 生	文系	18	初	無	面接
X.D.	男	28	学部生	文系	66	上	財団	面接
W.Y.	男	29	研究生	文系	6	初	無	面接
G.L.	女	24	研究生	文系	12	上	無	面接
C.W.	女	27	院 生	文系	85	上	国費	面接
Z.Y.	男	27	院 生	文系	54	上	無	電話
F.Q.	女	33	院 生	理系	21	初	国費	電話
Q.T.	女	24	学部生	文系	24	上	無	電話
H.H.	女	30	研究生	文系	12	上	国費	E-mail
W.W.	女	25	学部生	文系	41	上	財団	E-mail

Table 2 面接対象者の構成

項目	構 成		
	男 性	女 性	
性 別	男 性 : 7 名	女 性 : 6 名	
年 齢	最 小 値 : 24 歳	最 大 値 : 43 歳	平均 : 29.85 歳
身 分	大 学 院 生 : 6 名	学 部 生 : 3 名	研 究 生 : 4 名
専 攻	文 科 系 : 11 名	理 科 系 : 2 名	
滞日期間	最 小 値 : 6 ヶ 月	最 大 値 : 85 ヶ 月	平均 : 30.38 ヶ 月
日 本 語	上 級 者 : 8 名	中 級 者 : 2 名	初 心 者 : 3 名
将 学 金	国 費 : 3 名	一 般 財 団 : 4 名	無 : 6 名
面 接 方 法	面 接 : 8 名	電 話 : 3 名	E-mail : 2 名

実施状況

面接は基本的に筆者の研究室で行われた。しかし一部の面接対象者の希望により、対象者の研究室で実施された。時間は30分から1時間半程度である。

電話の3名はそれぞれ10分から40分程度の話が行われた。

E-mailを利用して、調査が実施された場合は、被調査者からE-mailが届いてから、筆者はその返信内容に関する追加の質問を送る形でやりとりが行われた。

面接内容

以下の4つの質問に沿った半構造化面接が行われた。

- 1) 来日経緯と目的、およびその目的の達成度
- 2) 来日前と来日後の日本と日本人に関するイメージの変化があったかどうか、およびその具体的な内容
- 3) 日本であった差別体験の有無および具体的な内容
- 4) 日本で困ったことおよび解決に至って援助してくれた人

面接記録のまとめ

この研究の目的は、中国の留学生が他国の留学生と比べて、適応度が低い原因を探ることにあるので、中国の留学生のインタビューなどの記録を見ながら、その特徴に焦点を当てて、検討する。

① 来日経緯と目的、およびその目的の達成度について

(1) 来日目的

留学の目的およびその達成度が、その後の留学生活に大きな影響を与えることになる。しかし、発展途上国の留学生と先進国の留学生との間には、留学の目的が本質的に異なる場合が多い。先進国の学生のほとんどは、母国で日本や日本語に関する研究をしており、「日本語の勉強をしたい」、「日本の文化に触れたい」などの理由で来日している場合が多い。彼らにとっては、日本に来到ること自体が目的の達成となる。しかし一方で、発展途上国の学生にとっては、日本に来到ることだけで満足できるわけではない。彼らの来日の目的はもっと複雑であり、容易に達成できるものではない。

その中でも、特に中国の留学生にとっては、留学自体が大変なことであり、来日するに至って、一層複雑な背景を持っている。

13名の中国の留学生があげた来日の目的をまとめると、以下ようになる。

- 1) 学位あるいは博士論文を書くため
- 2) 日本語を勉強するため
- 3) 先進国としての日本をみてみたかった

4) 経済的な目的

5) 自分の将来を変えるため

6) 特に理由はなかったが、ただ漠然に中国から離れたかった

その他個人的な理由として、自立する能力を養うためという理由をあげた被調査者もいた。

以上あげられた理由の1)学位のため、2)日本語を勉強するためについては他の国と同じであるが、ほかの4つの目的、特に「経済的な目的」と「中国から離れたかった」は非常に特殊なものであり、その背後には中国の経済や政治など複雑な問題が絡んでいる。

まず13名の内、学位あるいは博士論文を書くためという理由をあげたのは、約半分の7名だった。

F. M. : 「博士論文を書くためです。私の研究テーマは〇〇です。この分野に関する資料は日本に比べると中国ではまだ少ないので、日本に来ないと論文がなかなか書けません」

S. Q. : 「学位を取るためです。私の専攻は〇〇ですが、日本の大学の中でこの専攻があるのは〇〇大学だけです。私が在籍していた中国の大学も、中国の中では唯一この専攻を持っている大学ですが、マスターコースしかありません。私は中国にいた時、もうすでにこの分野では名が知られていました。論文などもたくさん書いていました。本の依頼も来ていました。しかし、やはり博士号がほしいので、日本に来ました」

Z. X. : 「学位を取るためです。中国では7年間高校の〇〇の先生をやっていましたが、もう少し〇〇の勉強をして、学位を取りたかったです」

F. Q. : 「私の専攻は〇〇ですが、今の中国でもいずれは博士号が必要となってきます。だったら、日本に来てもっと早く取ろうと思ひまして、日本にきました」

以上、例としてあげた留学生たちは、中国において高い学歴を修めており、学校教員であった者がほとんどである。

次に、「日本語を勉強したい」と理由をあげた学生は、全員中国の大学で、すでに日本語を専攻していた人たちであった。

Q. T. : 「中国の大学で日本語を専攻していましたので、もう少し日本語能力を養いたかったのです」

G. L. : 「中国の大学でも日本語専攻でしたので、もっと日本語を勉強したかったのです」

H. H. : 「中国の大学で日本語を専攻していましたので、もっと日本語を上手に使えるようになって、日本のことを客観的に把握しようと思ひて、日本に来ました」

これらの学生は大学を卒業した後、すぐ来日しており、比較的若く、日本語も堪能である。

また「先進国としての日本をみてみたかった」という気持ちは大部分の中国の留学生が抱いている。

S. Q. : 「〇〇大学の大学院にいていましたが、そこではみな外国に行ってみたかったです」

F. Q. : 「日本みたいな先進国に一度行ってみたかったのです。〇〇という分野においては、日本はアメリカと比べたらまだまだ遅れていますが、中国よりはかなり進んでいます。それは技術と資金、設備に特に現われています」

「経済的な目的」をあげた人も何人かいた。

S. Q. : 「経済的な要素もありました。当時私は〇〇学校の先生をやっていましたが、月給は〇〇元でした」。

Z. Y. : 「お金のためです。まあ、ある程度お金を貯めていればと思っていました」

「自分の将来を変えるため」として理由あげた人は以下のようなことを述べていた。

Z. X. : 「自分の将来を変えるためです。中国にいた時、非常に理想と現実のギャップを感じていました。大学を卒業した時、“重点高校”に就職したかったのですが、普通の高校になってしまいました。中国では、この両者の間には大きな差がありまして、後者では大学進学は非常に難しいのです。それなのに、とりあえず大学進学を目指して、無理にでも頑張らなければなりません。職場を変えたかったのですが、お金も人脈もないので、できませんでした。子どもとの付き合いは楽しかったのですが、仕事自体はつまらなすぎました。だから日本に来て、好きな勉強をやって、最終的には中国に帰っていい就職ができればと思っています」

Z. Y. : 「中国では大学を出ていたのでも、日本で学位を取って、帰っていい就職が出来たらと思っています」

W. Y. : 「学位を取って、中国に戻り、よりよい仕事ができることです。来年の頭に大学院の入学試験を受けますが、ドクターコースに行くかどうかはまだ分かりません。なぜなら中国では、今が一番チャンスの多い時期でして、これを逃したら、ドクターコースを出て、帰ってももう遅いのかもしれません」

面接を受けた留学生のほとんどが、いずれは中国に帰りたいと述べていた。日本留学は彼らにとって、将来よい仕事ができるための一つのステップになっている。

最後に、「特に理由がない」といった、漠然とした気持ちで日本に来た中国の留学生も少なくなかった。

Z. Y. : 「特にこれといった目的はなかったのですが、漠然と外に出てみたかったです」

X. D. : 「はっきりとした目的はありません。ただ単にチャンスがありましたから。若かったですし。お金のためでもなく、学位のためでもありません。未だに貧乏で

すし、大学もまだ出ていませんので、まだ中国にいたときの方が生活は上です。中国にいたときはいい職業も持っていましたし。日本にいる限りでは、あまり将来について計画が立てないような気がします」

C. W. : 「日本に来たかったというよりも、中国、〇〇大学そして完全に人生の目標を失ってしまった自分から逃げ出したかったです」

このように中国の留学生は、必ずしもはっきりとした目的意識を持って留学を選んだわけではない。

(2) 目的の達成

目的の達成度は、目的が複雑であればあるほど達成しにくくなる。そのため、目的の達成について「まだ半分、途中」と答えたケースが多かった。

S. Q. : 「学位を取ることと経済的なことは、“運”と言う要素が入っているような気がします。文科系なので、学位は必ずしも取れるとは限りません。また、奨学金も運次第などところがあります」

Z. X. : 「まだ、どちらも達成されていません。ただし、学位を取ることに関してはまだ先のことでですけど、好きな勉強はできています。自分の将来を変える点に関しては、とりあえずマスターを出て日本で就職したいです。就職できなかったら、ドクターコースに進学したいです。どちらもできなかったら、国に帰るしかありません。最終的には中国に帰りたいのですが、まだすぐにはそうしたくありません」

C. J. : 「まだどれも完全に達成されていませんが、いまは時間をかけてやっている最中です」

Z. Y. : 「お金は中国に帰ったとき、まあまあの生活ができればいいと思っているので、ほとんど目標に達しています。学位はいま修士1年なので、後1年ですね」

このように、学位を取るためとしている学生、特に文科系の学生にとっては、目的の達成ができるかどうかは完全に未知である。

(3) 来日経緯

来日経緯に関しても、国の事情もあり、中国の留学生は他の国の学生と比べて、特殊なケースも多い。中国の場合、日本に来て何をするというよりも、その前の段階として、日本に来ること自体が大変なことである。

まず、ビザの問題がある。ビザを申請するためには、「滞日間のすべての費用を負担する」という「保証書」を書いてくれる保証人が必要となる。もちろん、実際に「すべての費用を負担」する人はまずいないが、それでも書いた以上はそれなりの責任を感じるし、法律上の義務も生じる。よって、なかなか保証人になる人がいないのが現状である。結局、お金を出して保証人を買ったりする人も出てくる。一方、来日費用が非常に高いため、

借金して日本に来る人も少なくない。今回の被調査者の中にも金銭面で苦勞している中国の留学生が多いようである。また、いろいろな手続きで苦勞した学生もかなり多い。

S. Q. : 「予定していた保証人の家が火事になり、保証できなくなりました。そのため、大分時間をロストしました。入学許可は〇〇年10月に出ていましたが、〇〇年の2月にやっと次の保証人が決まりました。そして、〇〇年の4月にビザが下りましたが、中国での手続きのために、来日したのは〇〇年の5月でした。その間、日本語が分からないため、指導教官との連絡をしそびれてしまって、大学からはもうすでに除名されてしまいました。そこで、中国の事情が良く分かる先生にお願いして、その先生から指導教官に事情説明をしていただいて、6月にもう一度入学許可をもらいました」

Z. X. : 「親戚が日本にいたので、日本に来ないかと誘われました。来日の費用は親戚が出してくれましたが、これは返さなければなりません」

C. W. : 「保証人は日本語学校が紹介してくれました。紹介料として〇万円を払いました。入学金と来日に至る各費用は、親が半分くらい出してくれて、残りの半分は友達から借りました。後で、アルバイトなどをして、1年くらいで借金を返しました」

以上のように、中国の留学生が来日に至って、さまざまな苦勞をしていることが分かる。これも、来日以後の彼らの適応にいろいろと影響していることが推測される。

他の国の留学生と比べ、来日経緯と目的の複雑さが中国の留学生の特徴の一つと言える。そのため、目的の達成度においても、他の国の学生より低くなってしまう。これらの要因が、カルチャー・ショックにつながると考えられる。

② 来日前と来日後の、日本と日本人に関するイメージに変化があったかどうか、およびその具体的な内容について

中国の留学生が日本に来る前の日本に対するイメージは、以下のように分類された。

- 1) 抽象的で、よく分からなかった。
- 2) 先進国である。
- 3) 戦争などのことで、よくなかった。

来日後の印象および変化をまとめると、以下のようになる。

- 1) 抽象的→具体的になった。人はそれぞれである。
- 2) 経済大国ではあるが、必ずしも国民の一人ひとりが豊かな生活をしているとはいえない。
- 3) いいところもわるいところもある。

具体的なイメージは以下の通り。

S. Q. : 「まず、交通や通信、サービスなどの面について、素晴らしいと思います。これは来日前と来日後には変化がありません。日本人へのイメージは一言でいうと“人それぞれです”。来日前はあまりよくなかったが、来てみるとアパートの管理人や指導教官などはみない人達です…来日前の日本人のイメージは“内向的で、付き合いにくい”とか、抽象的で、すべての日本人がそうであるかのような感じでしたが、いまはもっと具体的になって、〇〇さんがといえるようになっています。それこそ人それぞれですよ。もう一つどうしても日本へのイメージを悪くしてしまうのはやはり政治の問題です」

Z. X. : 「来日前は日本が戦後の悲惨な状態から立ち直って、先進国の一つになったことに対しては、尊敬の念を抱いていました。しかし、来てからはそのような考えがどんどん薄れていきました」

C. J. : 「言葉が分からないので、表面的なものしかみていません。あまりよく分かりませんが、80%の日本人はやさしいという印象があります。まず、みな教養があるような感じがします。対人関係においても、仕事においても。ですけど、私にとって本当の意味での日本人はまだ分かっていないのかもしれませんが。日本に来る前には、日本に対する中国人が持っている伝統的な考え方が、もちろん私にもありました。だから、日本に対するイメージはあまりよくなかったです。ただし、明治維新から今日に至るまで日本が成し遂げた、奇跡的ともいえる発展には感心しています。その背後には、何か効果的な金融体制が立てられているはず。日本という民族が持っている“発展への野心”にはすさまじいものがあるような気がします。日本の国民も国の発展に“一心”していますが、これと比べたら、中国人はまさに“一盤散砂(砂の様にとまとまりがない)”です」

Z. Y. : 「来日前はあまり考えたことはないが、いい印象はなかったです。来てからは、周りの人達はみなまあいい人なので、よかったのですが、やはりコミュニケーションを取るのが難しく、友達にはなれません」

F. Q. : 「来る前に、いろいろと話は聞きましたが、どれも抽象的なものでして、直接日本人と接したことはありませんでした。日本に来てからは、まず他の人と同じく“ハネムーン”に入りました。日本人はみな礼儀正しくて、教養のあるようにみえました。しかし、徐々に時間が経つに連れて、日本人の冷たさというか、“拒人于千里之外”、“可親而不可近”(心理的な距離が遠く、一見親切のように見えるが、近づきにくい)に気づき始めました。今は日本人への印象は少ずつ持ち直していますが、最初のハネムーンにはもう戻れません。中国人

と日本人のものの捉え方が違いますし、人間関係なども違いますので、仕方ないといえば仕方がないです。もしかしたら、社会の発展に連れて、みなそうなるのかもしれない」

G. L. :「中国にいたときも、日本について少しは知っていましたが、深くは知りませんでした。来日後は、テレビ番組やニュース、日常生活を通して以前よりは理解できたと思います。大したイメージの変化はありません。ただし、どうして日本を好きになれないというのは：a) 日本は閉鎖的です。他の国への貢献が極端に少ないです。たこつぼみたいなのところがあります。b) 日本という国の「排他性」は、表面的な行動だけでなく、深い根を持っています。だから、中国人は日本文化に溶け込めないと感じてしまいます」

Q. T. :「父親は日本に何回も来ていました。日本のことはあまり好きではなさそうでした。しかし大学の時、日本の学生がいっぱいいましたので、日本や日本人への印象は父ほど悪くはなかったです。来日してみて、やはり a) 日本は島国根性を持っています。日本人は、自分達が一番優秀な民族と思っているかどうかは分かりませんが、人に与えた印象はそのような気がしてなりません。非常に排他的です。b) いいところは綺麗で、教育が発達しています。c) 日本の若者には夢がないような気がします」

X. D. :「中国にいたとき、旅行中に日本の学生と知り合ったりすることがありましたが、大した印象は残っていませんでした。強いていえば、ちょっとお金持ちという感じです。最初日本にきたときは〇〇にいましたので、田舎の人は比較的素朴で、みないい人でした」

W. Y. :「来日前は、日本に対する印象はあまりよくありませんでした。実際に来てみて、日本は複雑な国だなという感じがします。いい人も沢山いますが、やはり中国人とは違います。日本の一ついいところは、どんなことをするにしても、準備段階からしっかりとやりま。学校のイベントや店のサービスなどは、とても細かくよく配慮されています。それと、礼儀が正しいです。でも、野蛮な人もいます。日本の経済はやはり発達しています」

C. W. :「日本に来て最初の頃は、日本や日本人について考える余裕なんかありませんでした。毎日一生懸命生きてただけです。日本語学校に行き、ちんぷんかんぷんの授業に何とかついていって、終わったら友達に連れてもらって、アパートやバイト探しに出かけます。生活がかかっていたので、本当に一生懸命でした。これをすべて解決して、一息ついたところ、今までためていた鬱憤をすべて日本が嫌い、日本人が嫌い、日本とい

う二文字にぶつけました。また、バイト先でいろいろと嫌な思いをしましたので、そのときはどうしても日本を否定的に捉えてしまいます。その後、大学に入って、学校の先生や事務の優しい人たちに見守られて、初めて日本人と日本を客観的にみることができました。恐らくこれも、いまだに学校というコミュニティの中から出られない理由の一つになっています。私にとって学校の中は、安全です。周りの人たちも教養のある人間なので、嫌な所がないわけではありませんが、とんでもないことをやる人はまずいません。この中だったら自分も生き延びられるかなと、無意識のうちに思っているに違いありません。特にいまは日本人の友達が好きです。でも、日本という国はまだ好きとはいえません。どうしても日本人の生活スタイルには賛同できません。こんな生活のどこが楽しいのかと思えて仕方ありません」

W. W. :「日本に来る前に、日本人は礼儀正しい、良く働くというイメージを持っていました。今でも確かにこういうふうには思っていますが、その裏に、表と本音の違いとか、ストレスがたまる等の社会的な現象もよく分かってきました。つまりイメージが変わりました」

このように、全員が何らかの形でイメージが変わったのが中国の留学生の一つの特徴と言えよう。

中国の留学生の日本に対するイメージの背後には、歴史的な問題があり、来日前の日本へのイメージがネガティブなものが多い。来日後はそれぞれの境遇によってポジティブに変化したり、一層悪くなったりと人それぞれであるが、共通しているのは、一人ひとりの日本人に対して好感を持っている学生が多いのに比べ、日本という国への印象があまりよくないことである。

③ 日本であった差別体験の有無および具体的な内容について

日本での差別体験の有無は、日本へのイメージや対人関係にかなり影響する。面接して驚いたのは、中国の留学生のほぼ全員が、何らかの形で差別に近い体験をしていることである。これについては、経済的な要素が大きいと考えられる。大部分の留学生があげた「差別体験」は、アルバイト先であったもので、国費などの奨学金を持っている学生はアルバイトをする必要がなく、必然的にそのような体験にあう可能性は減少する。

S. Q. :「やはり日本の上下関係は嫌いです。特に、バイト先などではときどき理不尽な指示をされますが、そのときはきちんと断るようにしています。日本の場合いじめという問題がありますが、それは中学校とかでは暴力などの形で現れますが、大人の社会では上下関係として現れます。中国人にとっては、みな同じ雇われている

人間なので、横の関係しか考えられません。だから、先輩からの指図は受けません。衝突が起きる時、必ず自分の言い分をきちんと相手に伝えます。これが意外と効果的で、一度やったら、向こうは二度といじめてきません。まさに“弱肉強食”の世界です」

Z. X. :「来たばかりの時、迷子になったため、バイトの時間に遅れました。説明を求められました。日本語がまだあまりしゃべれなかったため、なかなかうまく説明できませんでした。その時、相手の人が私に指をさして何かを言いましたが、内容は分かりませんでした。私はその態度に怒って、たどたどしい日本語で“中国人にとってはこの姿勢はだめ”(中国人にとっては人に向かって指をさして話をするのは非常に失礼なことです)と言いついて、そのまま帰りました。それからしばらくの間は、この会社からのバイトを一切やりませんでした。ですけど、いまは生活のためだと割り切って、いい仕事があればやっています。ただし、いまはどのバイト先でも、なるべくしゃべらないようにしています。前は日本という国を気に入っていましたが、いまは日本人の“俗っぽさ”にあきれています。例えば、私はよく引越し会社のバイトをやっていますが、最初はよく先輩に理不尽な指示をされます。しかも、その表情やしぐさはいかにも“あなたが中国人だから”と言う感じです。そんな時私はまず無視します。それでもしつこく言ってきますと、“自分でやってよ”とはっきり断ります。これで、向こうは二度と言ってくる。その現場の責任者には気に入られているようで、彼からはよくバイトの誘いの電話がかかって来ますし、給料を配る時も他の人に対して呼び捨てなのに、私にだけは〇〇さんと呼んでくれます。それに気付いた周りも、私に対する態度は豹変しました」

W. Y. :「6月から3ヶ月間アルバイトをやりましたが、いまは全部やめました。最初の料理屋さん小さい店で、店長も優しい人でしたが、私の給料を“苛扣(給料が計算に合わない)”するので、やめました。そのときは怒っていましたが、いま冷静に考えてみたら、それほど悪い人ではなかったのかもしれない。店長は私に対してずっと丁寧語を使っていましたし、暇の時に日本語をも教えてくれました。他の店では考えられないですよ。でも、最初の月の給料は私の計算よりも5千円少なかったのですが、そのとき私は何も言いませんでした。そうしたら、次の月は2万以上、計算と合いませんでした。私はやめると言い出したら、ちゃんと計算通りのお金が出ました。これはどう考えてもおかしいですよ。そのときは頭にきてやめたのですが、もう少し冷静になって、我慢すればよかったのかもしれない。次のアルバイト先の店長はいい人でしたが、息子が18、9歳のガキ

で、とんでもないやつでした。あるとき、店長がいなかった。彼はわざとけんかを売ってきました。その時我慢して手を出さなかったのですが、後にこのことを友達に話したら、みな殴ればよかったのと言います。私がやめると言ったとき、その息子が店長に電話しました。店長は、今日何があったかはまだよく分かりませんが、やめないでほしいようなことを言いましたが、私はあなたの息子に聞いてと答えました。本当に頭にきていました」

ただし、同じ体験をしても、受けとめかたは人によっては非常に違いがあるようである。

X. D. :「バイト先などでの差別体験は、別に日本という国がいいとか悪いとかの問題ではないような気がします。中国も同じだと思います。いい人もいれば悪い人もいます。中国人を差別したりするような日本人は、教養のない日本人です。そのときは、まず中国人としてのプライドを持って、非を言われるようなことをまずしないことです」

一方、アルバイトの経験がなくても、大学などでの人間関係に不満を抱いているケースもある。

F. M. :「やはり心の底では傷ついた感があります。例えば、私自身としては、日本の学生にも専門を教えられる自信がありますが、そんなチャンスは絶対与えてもらえません。日本社会のシステムはこれを阻んでいます。(母国で)教師をやっていたので、もちろんこのような地位を保ちたいです。学生という立場に戻るのとは特定の場合を除けば、やはりつらいです。だから、私はここで日本人に太極拳を教えています。ほとんどボランティアとしてですが、私にとっては自分の価値を再認識する場にもなっています。やはり自分は教師だ、人に教えることができるんだ、という感じです。ただし私の場合は、中国にいるときも博士コースの学生という、もう一つの身分がありましたので、仕方がないと思えば諦めがつきます。心の底からは、日本の先生たちにも平等に扱ってほしいです。彼らと会話をする機会が欲しいのは、こちらは一方的に話を聞くのではなく、自分の意見も述べたいからです。日本語がしゃべれない人なら、仕方がありませんが、私にはそのような希望があります」

F. Q. :「私は国費ですし、指導教官も学生のアルバイトを認めないので、バイトをしたことがありません。だから、他の留学生みたいにバイト先で嫌な思いをしたこともありません。私の研究室は4人がいて、日本人二人と私を含む中国人二人です。私を除いて、みな男の人です。日本の学生はやはり留学生を“別人”とみているのがよく分かりますが、私は女性なので、みな親切にしてくれます。しかし、もう一人の男の留学生に対しては、

態度はだいぶ違います。中国にいたときも、病院という知識人が集まるところにいましたから、もうそのような環境にはある程度慣れました。いわゆる“隙間に生きる”ことを身につけて、他人のことには一切口を挟んだりしません。だから、いま日本にいても、同じような宗旨で、“管好自己的事，少説話，有耐心（自分のことをちゃんと管理し，口数を減らし，気を長くする）”を守っています。まさしく中国のことわざ“沈黙は金（沈黙は金なり）”の通りです」

他の国の留学生と比べ、中国の留学生の方が経済的な問題を抱えている人が多いので、アルバイトで生活費を補うのが通常である。そのため、アルバイト先で差別体験をしている人も多い。そういった体験が、対日感情がネガティブになったり、自尊心が傷つけられたり、カルチャー・ショックにつながってしまう。また、今回面接をした中国の留学生は、中国にいたとき、すでに先生になっている高学歴な人が多かったため、日本で学生という身分に戻ってしまうということに、戸惑いを感じる人も少なくなかった。

④ 日本で困ったことおよび解決の援助をしてくれた人について

中国の留学生は、広い範囲にわたって困難を抱えている。まとめると、以下ようになる。

- 1) お金を含んだ生活上の問題
- 2) 研究を含んだ言葉の問題
- 3) 日本人とのコミュニケーションの問題
- 4) 精神的な問題

これらの問題が原因で、留学生にとって、援助を求められる相手は、結局留学生同士となってしまう。ただし研究面においては、指導教官や同じ研究室の日本学生に援助を求める場合もある。この中で保証人に助けもらったケースも一例あった。

まず、生活上の問題に関しては以下のようなものである。

F. M. : 「簡単に言うと、まず生活の問題があります。例えば、寮に入ったとき、ベットと冷蔵庫以外は何もなかったです。ボランティアの人は多少援助してくれますが、こちらからはなかなか言えません。留学生会館の管理は全部日本人がやっていますが、もしその中に留学生がいれば、もっとよくなるような気がします。ボランティアの人は、よく服などを持ってきてくれますが、それは一番必要のないものです。自分の服でもどんどん捨てています。違った環境の中で生活をしているので、相手の要求がなかなか分かりませんよね。結局一番分かってくれるのはやはり留学生です。留学生の間でどんどん情報が回ってきますし、交流も増えます。問題に出くわすと、やはり

留学生同士に援助を求めます。私の場合言葉が分かりやすいので、人を助けることもままあります。例えば、人に付き添って、病院や買い物に行ったりします。結局交流のできる人にまず助けを求めます。〇〇人はやはり〇〇語をしゃべる人と親しくなりやすいです。日本人に援助を求めることもあります。それは主に研究に関するものです。しかしそれも難しいです。先生達は忙しそうだし、私は一体何が欲しがっているのかは分かりませんし」

C. J. : 「アパート探しが大変でした。まず、そのために〇〇市に開催された留学生のパーティーに出かけて、情報を集めました。その後留学生を相手にアパートやアルバイトを紹介している施設を通して、今のアパートを見つけました。契約の時は日本語が分からないので、日本の学生に付き添ってもらいました」

G. L. : 「1ヶ月に1万円の補助金をもらっていますが、やはりバイト代で生活維持しなければなりません。バイト先では唯一の外国人なので、みなと距離を保ってやっています。基本的にはみな学生でいい人たちです」

X. D. : 「a) いろいろとありますが、例えば、バイトと勉強と健康など。〇〇工場で働いていたとき、手がベルトに巻き込まれて、大怪我を負ってしまったことがあります。未だに中指が曲がりません。でも、生活にはほとんど支障がありません。困ったときはまず自立しなければなりません。そして、友達に助けられました。b) 経済的には私立大学なので、年間90万円（減免してもらって、残りは半分くらい）の学費を支払わなければなりません。今は月4万9千円の奨学金をもらっていますが、足りない分はバイト代で補っています」

生活上の問題に続いて、言葉を含んだ研究上の困難を挙げる学生も多かった。

F. M. : 「一番困っているのは資料探しです。どこににおいてあるのか、どうやって手に入るのかは分かりませんから。このことに関する援助がもっとほしかったです。これは、結局お互いにどれくらい理解しているかに大きく依存しています」

S. Q. : 「a) 何といても、言葉の問題があります。これを解決するには時間がかかります。b) バイトや生活、学習面での問題です。もちろん、留学生に援助を求めます。日本人に何か頼んだ時は、後々が面倒くさい。何か恩返しをしなければなりません。結局一番頼りになるのは自分自身です」

Z. X. : 「a) 物価が高い。b) 日本語が分からない。c) 生活習慣が違う。d) 大学院の試験が難しかったです。〇〇年3月に来日、その年の8月に試験に受けました。以上のように、日本での適応が難しいです。困っ

た時はまず“我慢”することです。私は我慢強いです。一番助けてくれたのは保証人です。83歳のおじいさんなのに、空港に迎えにきてくれましたし、大学まで連れて行ってくれました。アパートも提供してくれて、区役所にも一緒に行ってくれました。本当に助かりました」

C. J. : 「a) まず、何といても言葉です。もともと慣れていない環境の中で、なおかつ言葉が分からなかったら、本当に大変です。幸いなことに、〇〇大学の教授は英語がしゃべれるし、私に対してもやさしかったから、いろいろと助かりました。援助に関しては、まず、〇〇大学で同じ中国出身の留学生がいて、彼はもう日本に6年もいますので、いろいろと助けてくれました。そして、中国語を教えていた日本の学生がいて、ときどき彼に日本語を教わっていました。b) 授業などに関しては、内容がもともと分かるのである程度見当はつきませんが、自分の発言は全部英語でやります。その分、深いレベルの話はできません。論文も全部英語で書きます。日本の学生との交流はあまりないのですが、たまに英語がしゃべれる学生がいます」

W. Y. : 「言葉です。日本に来る前に日本語を勉強したことはありませんでした。日本に来て、留学センターの日本語授業を半年間受けました。もちろん、大学の講義にはまだついていけないが、なるべく出るようにしています。来た時はもっぱら英語を使っていたのですが、3ヶ月を経てからは、漢字を書きながらかたごとの日本語を使って、指導教官と会話をしていました。今はもう書かなくても、意味が通じるようになっていきます。指導教官はとても優しい人で、チューターを二人もつけてくれました。一人は生活上のチューターで、一人は勉強を教えてください。でも二人とも忙しくて、お互いに時間が合わないの、あまり会っていません」

日本語が比較的上手な留学生にとっては、日本の学生とのコミュニケーションに対する期待が大きい故に、戸惑いを感じることも多いようである。

G. L. : 「日本人とのコミュニケーションです。自分の意志をちゃんと表現できた上に、相手に理解してもらえるのが難しいです。それは日本語の問題ではなく、考え方の問題です。日本語が上手な故に、意志の疎通ができないときに、誤解が生じやすいです。日本人に心を聞いてもらうのが至難のわざです。日本人はいつも小さいグループで固まっていて、よその人間は絶対その輪の中には入れません」

Q. T. : 「来たばかりの時は、日本に融け込めないような気がしました。今は依然として、日本人の親友がいませんが、それほど違和感はなくなりました」

X. D. : 「今でも日本の学生との付き合いはありません

ん。まず彼らと年齢が違いますから」

異国で生活すると、精神的な疲れを感じることも少なくない。

Z. Y. : 「日本にいる時は、常に精神的に緊張しています。来日4年半、1回しか帰ったことがありませんが、そのとき1ヶ月半実家にいました。とってもいい休みとなりました。いままアルバイトなどはそれほど大変ではないのですが、精神的にはかなり参っています」

F. Q. : 「まあ、なんだかんだとって、外国というか、他人の国にいますので、心理状態などはやはり中国にいたときと違います。中国の生活と比べたら、今の生活は：a) 生活は保証されていますが、やはりレベルが落ちていきます。豊かさがありません。b) 精神的にプレッシャーを感じます。中国では毎日同じ生活を送るだけです。いまは毎日時間に追われているような感じがします。体も疲れやすいです。c) 先生から学生になるという役割の変化には、それほど違和感はありませんでした。しかし、友達の数がだいぶ減って、友人との付き合いが少なくなっています」

以上のように、中国の留学生が抱えている困難は、生活と研究の全般に広く及んでいる。まず、何といてもも経済的な問題が重荷として、中国の留学生に大きくのし掛かっている。これは自分でしか解決できない問題であるため、多くの中国の留学生にとって精神的な負担となっている。一方、研究面においても、日本語が分からないまま来日している学生が多いため、すんなり研究に入ることが難しい。また、言葉の問題が、中国の留学生と日本の学生との間のコミュニケーションの支障になっている。こうした幅広い範囲で遭遇した困難の一つひとつが、カルチャー・ショックを引き起こす要因として作用する。

一方、援助のことにしても、結局は、中国人同士のコミュニティーの中で行われており、積極的に日本人や他の国の留学生に援助を求めることはほとんどない。これも中国の留学生を孤立させてしまう大きな原因となっている。

考 察

今回の面接を通して、中国の留学生の特徴を以下のようにとまとめることができる。まず、来日経緯と目的が複雑であり、そのため、目的の達成度が低い。田畑と田中(1991)は、留学動機と現在抱えている悩みとの関連を調べたところ、「日本文化」や「日本研究」など、日本に直接関連した来日動機を持つ者の方が、留学生生活への満足度が高く、「どこか外国に行きたかったから」などの受動的な動機で来日した者のほうが、日本での生活になじみにくいことを見出しており、本研究もこれを支持

する。中国の留学生の場合、日本という国に関心があったり来日している学生ももちろんいるが、その大半は、もっと複雑な理由で来日している。その背後には中国という国の政治制度や、経済状況などさまざまな原因が絡んでおり、純粋に「日本文化に触れたい」といった理由で来日する学生は少ない。来日目的が複雑な故に、目的の達成度も低い。目的の達成度は留学生活への満足度に直接結びつく一つの指標でもあるので、これが中国の留学生の適応度に大きな影響を与えているのではない。

Veroff (1963) は、アフリカの留学生を対象とした研究の中で、経済問題が留学生の学校での研究活動に大きな影響を与えていると示唆した。本研究でも、Veroff の研究を支持する結果が見出された。中国の留学生のほとんどは経済的な問題を抱えており、それを補うためには、アルバイトをするしか他に方法がない。しかし、アルバイトと学校での研究活動の両立は非常に難しく、研究したいが時間も体力もないといった切実な訴えを面接の中で数多く聞くことができた。また、アルバイト先の環境は大学よりも複雑で、その中で留学生は差別に遭いやすい立場に置かれているといえよう。このような差別体験は、留学生のプライドを傷つけると同時に、留学生の対日感情をネガティブな方向へと導いてしまう。また、ホスト国の人々との交流においても、中国の学生数は留学生全体の半分以上を占めており、どうしても中国人同士の付き合いが増えてしまう。その一方で、日本人が欧米諸国に強い憧れを持っているのも事実である。以上の双方が中国の留学生と日本の学生との交流を阻んでいるように思われる。Selltiz & Cook (1962) は、ホスト国の親友が一人でもいれば、対ホスト国のイメージも変化することを示唆したが、なかなか日本人の友達ができないと訴えた留学生が多数に存在することは、対日感情をネガティブのまま、ポジティブに変化しない大きな原因の一つであろう。

さらに中国の留学生は、経済面以外にも言語など様々な問題を抱えているが、その解決法は自力以外に、同じ中国人同士に援助を求める傾向が強い。すなわち、日本人との十分なコミュニケーションを取っていない学生が多い。以上のように、多様な要因が複雑に関連するために、中国留学生の不適応をより深刻化してしまうことが、本研究より明らかとなった。

本研究は、中国の留学生が他の国からの留学生と比べ、日本における不適応がより深刻である原因を検討する目的から、半構造化面接を行った。その結果、来日目的の複雑性と歴史上の問題に起因する対日イメージ、差別体験や経済状況、コミュニケーション上の問題など、様々な要因が複雑に関連していることが明らかとなっ

た。今後は中国の留学生をどのように援助するかが大きな課題となる。

引用文献

- Dadfar, S. & Friedlander, M. L. 1982 Differential Attitudes of International Students Toward Seeking Professional Psychological Help. *Journal of Counseling Psychology*, 29, 335-338.
- 早矢仕彩子 1997 外国人就学生の自己認知, 自・他文化への態度が適応感に及ぼす影響心理学研究, 68, 346-354.
- 石附 実 1989 日本の対外教育 一国際化と留学生教育 東信堂
- 岩男寿美子・萩原 滋 1977a 在日留学生の対日イメージ(1) - 第一次調査資料と若干の考察 - 慶応義塾大学新聞研究所年報, 8, 9-34.
- 岩男寿美子・萩原 滋 1977b 在日留学生の対日イメージ(2) - SDプロフィールの検討 - 慶応義塾大学新聞研究所年報, 9, 27-72.
- 岩男寿美子・萩原 滋 1977b 在日留学生の対日イメージ(3) - 滞日期间に伴う変化 - 慶応義塾大学新聞研究所年報, 10, 15-29.
- 岩男寿美子・萩原 滋 1978b 在日留学生の対日イメージ(4) - ケース・スタディー - 慶応義塾大学新聞研究所年報, 11, 17-29.
- 岩男寿美子・萩原 滋 1979 在日留学生の対日イメージ(5) - パネル・スタディー - 慶応義塾大学新聞研究所年報, 13, 21-50.
- 岩男寿美子・萩原 滋 1987 留学生が見た日本 - 10年目の魅力と批判 - サイマル出版会
- 岩男寿美子・萩原 滋 1988 日本で学ぶ留学生 - 社会心理学的分析 - 勁草書房
- 葛文綺 1999 留学生の異文化適応に関する研究 名古屋大学教育学部修士論文 (未公開)
- Morris, R. T. 1956 National Status and Attitudes of Foreign Students. *Journal of Social Issues*, 12, 20-25.
- 文部省 1997 学校基本調査報告書 (高等教育機関) 平成9年度 - 学校調査・卒業後の状況調査・学校施設調査・学校経費調査 - 大蔵省印刷局
- Perkins, C. S, Perkins, M. L, Guglielmino, L. M. & Reiff, R. F. 1977 A Comparison of the Adjustment Problems of Three International

資 料

- Student Groups. *Journal of college student personnel*, 18, 382-388. American College Personnel Association.
- Schild, E. O. 1962 The Foreign Student, as Stranger, Learning the Norms of the Host-Culture. *Journal of Social Issues*, 18, 41-54.
- Selltiz, C, Hipson, A. L. & Cook, S. W. 1956 The Effects of Situational Factors on Personal Interaction between Foreign Students and Americans. *Journal of Social Issues*, 12, 33-44.
- Selltiz, C. & Cook, S. W. 1962 Factors Influencing Attitudes of Foreign Students toward the Host Country. *Journal of Social Issues*, 18, 7-24.
- 周 玉慧 1993a 在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み 社会心理学研究, 8, 235-245.
- 周 玉慧 1993b 在日中国系留学生と日本人学生におけるソーシャル・サポートの比較 広島大学教育学部紀要, 42, 63-69.
- 周 玉慧 1995 受け取ったサポートと適応に関する因果モデルの検討 - 在日中国系留学生を対象として - 心理学研究, 66, 33-40.
- 田畑佳則・田中共子 1991 広島大学における留学生指導の現状と課題 - 留学の動機を中心にして - 広島大学留学生センター紀要, 2, 43-63
- Veroff, J. 1963 African Students in the United States. *Journal of Social Issues*, 19, 48-60.
- (1999年9月16日 受稿)

ABSTRACT

A Study of Cross-cultural Adaptation about International Students

Bunki KATSU

The purpose of this study was to examine the reasons why Chinese students are less adaptive to the life in Japan than the students from other countries.

The major characteristics of Chinese students in Japan were as follows: (1) the motivation or purposes of studying in Japan is complex and therefore their purposes are less achieved than those of the students from other countries; (2) since almost all of the Chinese students have financial problems and have to do part-time jobs in order to make their living. The discriminative treatments they have received there could make negative images of Japan; (3) Chinese students tend not to have enough communication with Japanese students. They often ask for support only from Chinese when solving several other problems they have.

Key words: cross-cultural, adaptation, international students